

**パリアン人物伝 私を育ててくださった方々**

医療法人社団パリアン理事長 川越 厚

第4話 森 亘先生**“美しい死”一病理学者にとっての納得死一****先生に病理学の指導を受けた2年間の幸運**

タイトルの『美しい死』は、森亘（もり わたる）先生が日本医師会創立50周年記念講演で用いられた言葉だ。控えめなお人柄ゆえ、一般の人で森亘の名を知る方は少ないと思う。しかし、私たちにとっては雲上人。東大医学部病理学教授、東大総長などを歴任した後、文化勲章を受賞された有名人だ。

先生は劇症肝炎の発生機序の一つの可能性としてシュワルツマン反応を研究した方、またエール大学皮膚科教授のラーナー先生のもとで、仲間と共に“メラトニン”を発見した研究者として歴史に名を遺している。

私は29歳の時に急性腎炎を患い、2年間産婦人科の臨床を離れ、病理学教室に内地留学したのだが、その時に森先生から病理学の指導を受ける幸運に恵まれた。

東大病理学教室は伝統的に人体病理を重視し、総検閲と称する症例検討会が月曜日の朝、定期的に行われていた。解剖台の前に立つ森亘、島峰徹郎両教授の前で、自分が剖検したケースのプレゼンテーションを行うのであるが、緊張しながら指導を受けたことが懐かしく思い出される。背筋を伸ばした長身の森先生はどちらかというと寡黙で、時折質問や短いコメントをはさみながら、静かに私たちの説明を聞き入ってくださっていた。

せっかくなので、解剖の話をしたと思う。

在宅死の剖検で見た美しい肺の意味とは

私は病理学教室在籍中の2年間で、約80体の剖検を経験した。この時、特に印象に残っているのは、ほぼ全例のご遺体に水分が過剰に投与されていたことだ。両肺を取り出し、重量を測定して大きな包丁で割をいれると、そこから水が染み出してくるのである。“流れ出てくる”という表現のほうが適切な場合も



▲森亘先生（1926年1月～2012年4月）
日本病理学会ホームページより

ある。しかしその時の“驚き”は、それ以上の問題意識に繋がることはなかった。

この問題の重要性を再認識し、病理の立場から臨床にFeedbackしなければならないと考えるようになったのは、病理学教室を離れて10年後、私が在宅ホスピス医になって間もない1990年頃のことだった。当時、私は“がん患者が家で亡くなって本当に良いのか”と悩みつつ、在宅ホスピスケアに携わっていた。

その確信が得られないため、ご家族の同意を取って、できるだけ多くの病理解剖を行った。そこで多くの知見を得たのであるが、私はその成果を『在宅死した癌患者の剖検所見 その臨床的意義』と題した原著論文を学会誌に発表した（日本癌治療学会誌 28：619-625、1993）。

そこで気づいたことは、死因が肺炎であっても、肺の重量は軽く、正常部分には水ではなく空気が入っている、という当たり前のことだった。森先生の言葉

を借りるならば、『品位ある医療を受けて死を迎えた方の美しい死』を見た、ということになると思う。このときほど、“病理学を学んでおいてよかったな”と思ったことはない。

節度ある医療がもたらす美しい死

森先生の医師会創立50周年記念講演の演題には、『品位ある医療の、一つの結末』という副題が付けられており、この“美しい死”という言葉には、「病理学者が納得する死の形」が示されている、と私は考えている。この講演の全文は、『美しい死』というタイトルで2007年に株式会社アドスリーから出版された本の“結びの言葉”に収載されている。

森先生は講演の中で『美しい死』に関連して次のようなことを語っていらっしゃる。

“私ども医師にとっては、(中略)人生の終焉として「いかなる死を看取るか」ということも極めて大切なことであり、ことに最近のように医学・医療が格段に発達した状況の下では、大いに心すべきことである。”

“適度な医療が施された後の遺体には、その内臓には、それなりの美しさが感じられる。”

“私は実は、節度ある医療とは同時に品位ある医療であると考えております。”

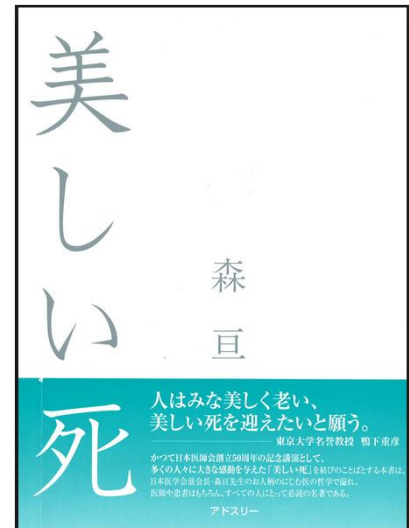
この本を読むと、病理学者の森先生が病理学だけではなく、医療の在り方、ひとの「生き死に」に対してどのように向き合っているか、どのよう

に考えていらっしゃるのかがよくわかる。

実を言うと病理学教室在籍中、私は病理以外のことで森先生と親しく話をすることはほとんどなかった。森先生が

いのちの終焉について深く考えていらっしゃることを知ったのは、先生の最晩年の頃だ。それは、ある講演会の終了後、先生が私を捕まえて「川越さん、いい仕事をしているね」と一言、笑顔でほめていただいた時のことだった。

それ以来先生は、私の講演を何度か聞きに来られた。私は最初の頃、隅の方でじっとこちらを見ながら耳を傾けていらっしゃる先生を見つけて、大変緊張した。しかし、しばらく経ったころ、私が高野山大学で連続講義した際、そこに参加されていた森先生と高野山の宿坊で一緒に過ごさせていただき、朝食会場まで先生をエスコートして一緒に食した。何物にも代えることのできない、大切な宝となって私の心に残っている。



▲『美しい死』
(2007年 アドスリー刊)

ラジオ NIKKEI『大人のラジオ』誌上配信 ゲスト:公益財団法人東京YWCA「シニアダイヤル」

川越厚医師が出演しているラジオ番組の2018年6月29日放送分を抜粋してお届けします。ゲストは、公益財団法人東京YWCA「シニアダイヤル」の事業責任者の土岐さんと二人の相談員の方々です。シニアダイヤルの設立の経緯や相談の内容などを川越厚医師がインタビューしました。事業の特性を考慮し、相談員は匿名です。

川越 YWCA というのは Young Women's Christian Association の略ですが、どのような組織か少し説明していただけますか。

土岐 YMCA も YWCA もイギリスが発祥で1850年ごろに始まった運動です。YWCAは女性にフォーカスをして世界中に広まって、現在120の国

と地域で活動している団体です。日本でYWCAが始まったのが1905年、今年で113年になります。全国にYWCAはあるんですが、東京YWCAは日本YWCAと同時期に始まっています。

川越 その方たちがシニアダイヤルという相談電話を始められた。高齢社会の真ただ中で非常に

大事な活動だろうと思います。まず、シニアダイヤルの誕生のことをお伺いしたいんですが。

土岐 東京 YWCA には地域センターがあるんです。会員が高齢化してくる中で、ほんとはセンターとか本部(東京・御茶ノ水)に行きたいけれど無理だという方たちが出てきた。そういう方たちのための活動ができないかという声が上がっていたんです。

相談員 最近、顔を見せないね、っていうことでお電話をしたら、「3日も誰とも話していなくて、声が出なくなっちゃって」とおっしゃる。そんなことがあって、そういう方とお話をする活動はどうかということがきっかけです。

川越 自分たちは Young Women's の組織だけれど、実は、会員がオールドになっちゃって孤独の中にいると。それを会員の中で何とかできないかということでスタートしたんですね。

土岐 それだけではなくて、高齢社会を迎えている中でボランティアさんたちが YWCA ならではの社会貢献はないかということもあったと思うんです。ずいぶん話し合いを重ねたシアンケートも取ったりしたそうです。それで集約されていったのが電話相談で、しかもシニアの方たちに向けてということになったそうです。

川越 高齢の問題って、ともすれば自分の問題として閉じこもってしまんですが、仲間に働きかけなければいけないというのが最初にあったということなんですね。

土岐 これをやろうとまとまるまでに 1~2 年準備をしたそうです。「いのちの電話」なんかは非常に緊急性が高いんですが、そうではなくて困ったとき、孤独なときに電話をかける、話す相手がいる、そんな存在になることが私たちにできることかしらね、ということだったので、キャッチフレーズが「寂しいとき、困ったとき、孤独なときに、思い出してお電話ください。そんなあなたの身近な一人になりたい」でスタートしたそうです。

川越 相談員同士でコミュニケーションとったり勉強したりすることはあるんですか？

土岐 定期的に研修をしています。偏ったり、伺っていることで相談員自身が悩んでしまったりすることなどがありますから。

川越 相談ではかなり突っ込んだ話をすると思う

んですが、守秘義務という難しさがあるんじゃないですか。

土岐 こちらが知ったことをもちろん表に出しませんし、今日相談員の名前を出さないのも、こういう事業の性質上、特定できないようにそうさせていただいています。

川越 こういう仕事は多分、自分を保つというのが結構難しいですよ、医師も看護師もそれが難しいんですが、相談員の方は慣れるのに時間がかかるでしょうね。1年かけて研修をやったそうですが？

土岐 初期のころは宿泊の研修もしたと聞いています。今は新人研修を 10 回ぐらいで 1 クール。講義とかワークとか。それからロールプレーに重きを置いています。やはり相談員はいろいろなことを伺うので苦しくなる。そういうものを自分がどうしたら横におけるか、その訓練がどうしても必要なのです。

川越 ボランティアでこれを行っているところが素晴らしいと思うんですね。相談日はどのくらい持っているんですか？

土岐 最初は週 3 日、10 時から 13 時 30 分まででスタートしたんです。しかし、高齢の方が一人寂しくなる時間は夕方だったりするので、今は月曜日から土曜日(第 3 は休み)の 13 時から 17 時までやっています。

川越 お年寄りが寂しくなるのは夕方だ、それはまさしく活動の中で学ばれたこと。相手に寄り添っていくということを教えられたことですね。顔が見えない中で、どこまで話していいのかとか、とても高度なコミュニケーション能力が必要なんじゃないでしょうか？

土岐 細かいところに気を使いながら話すので、非常に緊張して電話を受けていることは間違いありませんね。

川越 差支えがない形でどんな相談があるのかをお話いただけますか？

土岐 家族のこととか、今日一日、誰とも話していないので相手になってほしいとか、サークルなんかに参加しても居場所を見つけられない、あるいは家族を亡くした悲しみなどの別れのつらさや健康医療のこと、老後の不安とかですね。

川越 僕らがやっているホスピスケアは、間もな

く亡くなる患者さんを診ていくので、家族との関係で抱えている問題が凝集されて出てくるんです。子どもに迷惑をかけるんじゃないかとか、今まで自分が面倒を見ていたのに、面倒を見てもらうつらさを言う患者さんもいます。非常に難しいな一と思うこともあるんですよ。

相談員 家族には言えないからこそ、匿名で話せる私たちに話すということですね。

川越 僕らが相談を受けたときは、解決のヒントを与えたりするんですが、シニアダイアルではじっと聞くと、まさに傾聴ですね。

相談員 私たちは聴いて寄り添うことが一番大事だと思います。

川越 最後に、皆さんの思いを話していただけますか。

土岐 YWCA は平和な社会を実現するためにということで新しいことを生み出しながら100年近くやってきたわけです。今の社会に必要なことは何かと考えたときに、シニアダイアルは非常に

大事な活動だと思っています。

相談員 電話を通してかけてくださった方の悩みに寄り添って一緒に考えることで、その方が明日からまた頑張ろうと思えるように持っていくということかなと思っています。

相談員 若い人もお年寄りも男性も女性も関係なく、平和なうちに共存できる社会にしたいなと思っています。かけてくださった方が、「気持ちが楽になりました。また明日から頑張ってみます」と言っていたら、「ああ、よかったな、またお電話受けよう」と思うんですよ。

★この番組の放送内容は、ラジオ NIKKEI オンデマンドでお聴きいただけます。

前半

<http://www.radionikkei.jp/podcasting/otona/2018/06/player-ywca-1.html>

後半

<http://www.radionikkei.jp/podcasting/otona/2018/06/player-ywca.html>

「『納得のいく死』を実現する医療」講演

2018年6月2日に開催された「福知山市宗教者懇話会」で、川越医師が「『納得のいく死』を実現する医療」と題して講演を行いました。講演後に主催者の方からのご感想をご紹介します。

私は先生のご講演を拝聴させていただき、「すべての人が納得のいく医療」という視点にとっても魅力を感じました。医療だけでなく、様々な分野でも大切にしていかなければならないご示唆をいただいたようにも存じます。そこには小さな調和があって、真実の在りようが見えてきます。

講演が終わった後、いろいろな方に感想を聞きました。半年前に父親を亡くされた息子さんでしたが、終末前は、「家に帰りたい」と言っていたそうです。「在宅ホスピスのような医療がもっと広がってほし

い」と言ってくれました。とても感慨深い出会いでした。

仏教では、「中道」という教えがあります。これは、両極端の真ん中という意味ではなく、真実もしくは真理・法どおりの歩み（聖道）をするものです。とても共感させていただきました。

また、本日ご報告をいただいたお話なのですが、福知山のある老人介護施設において、すでに先生のご著書を読まれていた責任者の方が、今回の講演を直接お聞きになり、施設の方針を大きく変えていきたいと発表をされたそうです。これも大きな成果でした。

私たちの共通するところは、「すべてのいのちの尊厳」です。今後とも、地域貢献として良きメッセージを伝えられるよう努力・精進してまいります。また、何かの機会があれば、第二弾のご教授をお願いいたします。

立正佼成会福知山教会 本園雅一



ご家族からのお手紙

パリアンで約6年間、ボランティアをしてくださっていた乳がんの患者さんのご家族からのお手紙です。

▼患者さんはご自宅のお庭に咲いたお花をパリアンに絶やすことなく飾ってくださっていました。



パリアンの皆様へ

生前は姉のために、そして私たち家族まで含めて、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

姉はパリアンの皆様に、本当に信頼してすべてを任せていました。小さいころからの姉を知る私にとって、それは小さくない驚きでした。姉はどちらかというと好き嫌いのはっきりした人間で、社交的かという点、決してそうではない人でした。会社勤めをしていたころは、兄弟でさえ、口の利き方や話しかけるタイミングにまで気を遣っていた、そんな姉でした。それがパリアンの皆様には、素直にすべてを任せていました。皆様のことを信頼していました。きっと姉は、パリアンの皆様が「好き」だったのだと思います。

姉がパリアンに通わせていただいていたころは、よく厚先生や博美先生のお話を、寝る前に楽しそうにしていました。そんな時の姉は、幼稚園でのその日の出来事を、一生懸命話す子どものようなようでした。(中略)

姉は自宅療養に入ると、一日一日できなくなることが目に見えて増えていきました。自分のことが自分でできなくなるとは、精神的にも大変なのだろうなと思います。でも、姉はその大変な時期を、ましてや人生の最期を大好きな人たちに囲まれて、人を頼ることのなかった姉が、安心して人を頼って、いっぱい愛情に囲まれて、間違いなく、そのいっぱいの愛情を、姉自身も十分感じながら、実感しながら、過ごすことができました。

最期の数週間を、常に一緒に過ごした私から見ると、姉は最高に幸せであったと、自信を持って言うことができます。また、そう言える、思えることが、私の幸せでもあります。

そんな最高の幸せで、姉の人生を終えることができたのは、すべてパリアンの方々のおかげです。

本当に、本当に、ありがとうございました。



▲季節感あふれる、かわいい置物でいつも楽しませていただきました。

平成30年度 医学部実習学生への講義について テーマ「シシリー・ソンドースに学ぶホスピスケアの基本」

今年度の医学部学生の実習は、上記テーマについて学ぶため、訪問同行に加えて Cicely M. Saunders (シシリー・ソンドース) 氏が記した2本の論文を講読するという機会を持ちました。この論文のタイトルは、『Appropriate Treatment, Appropriate Death』と『The Philosophy Terminal Care』で、1978年に英国で発行されたテキスト『The Management of Terminal Disease (ソンドース氏監修)』の中から川越医師が選びました。ソンドース氏がセント・クリストファーホスピスを開設したのが1967年なので、このテキストに掲載されている論文は、約10年にわたる実績がまとめられたものであると同時に、実践に基づいたホスピスケアの哲学が記されていると考えることができます。

私たちは、ソンドース氏の考えに少しでも近づくため、単に上記論文を読み解くだけではなく、その意味を深く理解したいと思いました。そこで、重要と思われる概念の一つひとつを皆で意見交換しつつ吟味しました。また、患者さんが医療者に安心感を抱いてくださるためには、どうすれば可能なのかなどについても意見交換しました。結果的に学生の皆さんは、ホスピスケアとは「希望を持って生きることを支えるためのケア」、在宅ホスピスケアとは「今まで暮らしてきたとおりに、穏やかに生きることを支えるためのケア」という理解に達したようです。学生の皆さんは、ソンドース氏が目指したホスピスケアの学びをとおして、在宅ホスピスケアとは何かについても深く学ぶことができたように思います。

実習講義担当

パリアンスタッフ講演・講義予定

講演者	開催日	会	演題	会場
川越博美	8/23	にいがた発！在宅ホスピスケアボランティア講座	ホスピスケアボランティアとは	県立生涯学習推進センター(新潟市)
川越 厚	9/30	在宅医療・介護市民向け講座	納得のいく死を実現する医療	とねミドリ館(古河市)
川越 厚	10/19	第56回日本癌治療学会学術集會イブニングセミナー	医療者が知っておきたい社会保障制度	パシフィコ横浜
川越 厚	10/20	NPO 法人在宅ホスピスケアを広める会	納得のいく死を実現する医療	アミュゼ柏(柏市)
川越 厚	11/3	第29回日本在宅医療学会	座長(一般演題2 緩和ケア)	パシフィコ横浜
川越 厚	11/10	船橋在宅医療ひまわりネットワーク市民公開講座	納得のいく死を実現する医療	船橋市保健福祉センター
川越 厚	11/11	横浜市立大学医学祭 Medical Festival	納得のいく死を実現する医療	横浜市立大学

パリアン実習・研修予定



実習日	所属	実習・研修名	人数
9月7日、14日	日本財団 在宅看護センター起業家育成事業	実習	4名
9月18日	聖路加国際大学(4年)	生命倫理ゼミ	
9月18日~19日	帝京大学大学院 公衆衛生学研究所	終末期医療実習	2名
9月25日~10月22日(うち11日間)	聖路加国際大学 4年	総合実習	2名
11月・12月(各4日間)	東京都立墨東病院	初期臨床研修・地域医療研修	3名